

人工隠れ家における野生ニホンテンの出産 育仔と哺乳類学的ないくつかの知見

大畠 純二*・矢田猛士*

The Report on the Parturition and the Nursing of
the Wild Japanese Marten (*Martes melampus melampus*)
in the Artificial Den, and Some Mammalogical Notes with Photos
of them, at the foot of Mt. Sambe in Shimane Prefecture.

Junji Oohata and Takeshi Yada

1. はじめに

2012年、島根県立三瓶自然館の野外観察施設の中で野生のニホンテン (*Martes melampus melampus*. 以下、テンと記す) の出産と育仔が行われ、この時の様子は動画映像に記録された。

島根県立三瓶自然館（以下、三瓶自然館）は1991年10月に開館した。館の建設時に付属の動物観察小屋が建設されたが、これは館の建設地付近に以前からあった別の施設を付属施設として利用するために改修した際、そこに野生のテンが住み着いていたため、これを追い出す代わりに新たに動物観察小屋を建設してテンを導入しようと計画されたものである。三瓶自然館のマスコットキャラクターにテンが採用されたのも、これがきっかけである。

動物観察小屋は「テンの小屋Marten's cabin」と名付けられ、2階部分にはテンを導入するための部屋=人工隠れ家marten's chamber=artificial den for the wild martenが設けられた。テンの部屋には、予め寝床材料（巣材）として稻藁を入れておいた。三瓶自然館が開館した直前の1991年9月頃から、小屋の中に野生のテンを導入するために小屋の周辺とテンの部屋の出入り口にキウイフルーツ (*Actinidia sinensis*) の果実を置いて餌付けしたところ、その年の冬にはテンが小屋を利用するようになった。その後、現在まで、小屋は野生のテンによって利用され続けている。テンの部屋には、テンの小屋が建設された時から、ここを利用する野生テンの姿を三瓶自然館館内から観察できるようにTVカメラが設置されていたが、当初は録画

機能がなくてモニターで観察するしかなかった。しかし、2011年から動画映像を連続的に記録できるようになつたことで、人工隠れ家における野生テンの日常行動を連続的に観察できるようになった。

以下に、2012年に観察された出産育仔の記録と、2011年以降観察された隠れ家内のテンの行動等に加えて、1993年に大畠が撮影したVTR映像の中から選んだ野外におけるテンの行動等に関するいくつかの知見について報告する。

なお、今回の報告に当たって、テンの行動等の解析及び報告書の作成は大畠が行い、動画映像の記録、編集、保存処理等については矢田が担当した。

2. 人工隠れ家におけるテンの行動

(1) 人工隠れ家（テンの部屋）の利用

テンの小屋に造られた人工隠れ家の床面積は幅約1.5 m×奥行き約1.2 mで、壁面下部の隅に出入り口として高さ幅とも約15 cmの四角い穴が開けられており、1階の屋根から出入りできるようになっている。初めの頃は小屋の壁に丸太を立てかけて地上から屋根に上がるためのハシゴにしていたが、小屋はクヌギ (*Quercus acutissima*) やコナラ (*Q. serrata*)、ミズナラ (*Q. crispula*)、ウリハダカエデ (*Acer rufinerve*) 等が茂る林内に建てられており、テンはこれらの樹木を伝って上り下りできるため、現在はハシゴを設置していない。

毎年12月頃になると野生のテンが人工隠れ家に入ってきて、翌年の2月一杯位までねぐらとして利用し、

* 島根県立三瓶自然館、〒694-0003 島根県大田市三瓶町多根1121-8

The Shimane Nature Museum of Mt. Sanbe (Sahimel), 1121-8, Tane, Sanbe-cho, Ohda, Shimane, 694-0003, Japan



写真1. テンの部屋内の成獣2頭 (1993年3月)



写真3. 後足で首のあたりを搔く (2012年2月25日)

出産が行われない場合は春以降は利用しなくなるのが普通である。

部屋は1頭で利用されることが多いが、複数個体が同時に利用していたこともあり、1993年2月には、成獣3頭（♂2♀1）が同時に部屋の中に入っているのが見られた（写真1=2頭の成獣が入っていた時のもの）。2003年2月頃にも、成獣2頭が同時に部屋の中にいるのが見られた。

2011年2月からの映像に写っていた個体は1頭で、成獣♀である。この時から2012年の出産と育仔に至るまで同じ個体が使用していた。

映像に記録された隠れ家（テンの部屋）内における♀テンの日常行動は、非常に単調であった。日中は殆ど寝床の中で眠っており（写真2）、時々目覚めて短い時間グルーミング（写真3）した後で排泄をし（写真4）、排泄し終わるとまた眠りに就く。目覚めてから、グルーミング後に排泄し再び眠るまでに要する時間は2~3分程度であり、隠れ家にいる間に排泄のために目覚める回数は2~3回程度である。

普通、夜中に外出して翌朝に帰室するが、このパターンは常に一定しているわけではない。外出から帰室するまでに28時間かかった日もあれば、2011年3月25日のように夜中の22時12分に外出して約1時間後の23時24



写真4. 部屋での排泄 (2012年2月25日)

分にモグラを口にくわえて帰室した日もある→(2)参照。

(2) 食事

2011年3月25日22時12分に外出したテンが、約1時間後の23時24分に真っ黒な色の小型のモグラをくわえて戻ってきた（写真5）。帰るとすぐに敷きワラの上にモグラを置き、そのまま寝床に入って眠ってしまった。このモグラは、その夜中から翌朝にかけて4回に分けて食べられた。3月26日0時58分、突然寝床から飛び出すると短時間グルーミングし、持ち帰ったモグラを食べ始めた。数分間食べると、食べ残しを置いて眠ってし



写真2. 寝床で眠る♀成獣 (2012年4月1日)



写真5. モグラをくわえて帰室 - 矢印がモグラ (2011年3月25日)



写真6. 室内の大量のフン-床に散乱する黒色の物 (2012年2月25日)

また、1時32分と3時26分、9時58分（この時に、ほぼ完食した）にも目覚めた直後にグルーミングし、食べかけのモグラを食べてから眠ってしまった。

持ち帰ってきたモグラは、テンの顔の大きさとの比較から体長8 cm前後位と推定された。真っ黒な体色とその大きさからヒミズ (*Urotrichus talpooides*) かミズラモグラ (*Euroscaptor mizura*) のいずれかと考えられたが、前足の形はモグラ型であり後者の可能性が大きい。

(3) 排泄匂い付け

民家の天井裏などに住み着いたテンがそこに大量のフン尿をして困るという話はよく聞かれるが、三瓶自然館のテンの小屋においても室内に大量のフンが見られる（写真6）。排便と同時に排尿が為されるため、天井から尿が滴り落ちてくることがあり、テンに住み着かれた民家にとっては大変な迷惑となる。テンの小屋におけるカメラの映像では同じ箇所に排泄する姿が何度も観察されていて、「溜めフン (dung mound)」が形成されている。

野外におけるテンのフンは、よく目立つ石の上や隠れ家として使っている樹洞近くの太い枝の上などに見られる。テンのフンは人間の大人の小指か人差し指ほどの大きさで、細長くて黒い色をしている。同じ地点に新旧のフンが見られることがあり、そのような場所は長い期間にわたって使用され続けるので、テン自身がそこを「フン場」として認識しており、匂い標識 (scent post) の役割を持っていると考えられる。野外で餌付けされた個体では、歩きながら「匂い付け (scent marking)」と思われる地面に下腹部辺りを押し付ける行動を行うのが度々観察されている（写真7）。

3. 人工隠れ家での出産と育仔

(1) 出産とその直後の行動（2012年4月3～18日）

毎年12月になると野生のテンが寒さを避けるためにテンの小屋をねぐらとして利用するようになり、春になると（3月に入ると）利用しなくなる。小屋の中にいる時のテンは、排泄するのと時々グルーミングを行う以外はもっぱら眠り続けている。そして、夕方になると食事に出かけて行き、翌朝に帰って来るのが普通である。

1993年4月11日、テンの小屋へ入った際に、テンの部屋の方から幼獣の鳴き声が聞こえたが、この時は仔の姿を確認することはできず、また、それきり鳴き声を聞くこともなかった。この年以降2012年まで、テンの小屋での出産は行われていなかった。

2012年は、年の初め頃にはテンが小屋を使用しているのが確認されていたが、この年は3月に入っても使用し続けていた。3月半ばを過ぎる頃になると、テンが寝床（bed）の周囲に広がっている敷き藁を寄せ集めて寝床を整えるベッドメイキング行動（bed-making behaviour）を頻繁に行うようになった（写真8）。このような行動は過去には見られなかつたので、もしかすると出産が行われるかもしれないとの期待が生じた。シベリアに生息する近縁種のクロテン (*Martes zibellina*) は出産の2～3週間前から巣作りを始める⁽¹⁾とされており、テンの小屋のニホンテンもこの頃には既に出産準備期間に入っていたように考えていいだろう。4月3日0時13分の時点では、まだ出産は行われていないようだった。

出産（parturition）は、4月4日17時22分から18時過ぎの間に行われた。テンは寝床の中で横になって丸まった状態で尾を少し持ち上げ、尾の基部あたりに鼻先を寄せるという非常に特徴的な行動をしていた。この行動は藁をかぶった中で行われ、しかも非常に小さな動きだったので詳しい様子を見ることはできなかつたが、この時に出産したものと考えて間違いない（写真9）。

テンはこの後3時間ほど寝床に潜ったまま動かなかつたが、21時過ぎに目覚めて寝床から顔を出し、寝床周辺の藁を口にくわえてそっと引き寄せ寝床にかぶせるという行動を何度も繰り返して非常に念入りなベッドメイクを行った後、静かに寝床から出た。

寝床から出たテンは、寝床から少し離れた場所でグルーミング (individual grooming) を行い、それが終わると部屋から出て行った。この時のグルーミングのやり方は家ネコの毛繕いに少し似ており、舌を使って先ず前足を丁寧に舐め、次に手足や下腹部に付着した



写真7. 臭い付け行動—石の上を念入りに嗅いだ後、臭い付けした（1993年4月2日）



写真8. ベッドメイキング-寝床の周囲から藁を引き寄せる
(2012年4月4日)



写真9. 草の中で出産が行われた (2012年4月4日17時22分～18時過ぎの間)

汚れを舐め取るという非常に念入りなものだった（写真10）。恐らく、出産した時に体毛に付着した羊水などの汚れを舐め取っていたのだと思われる。

出産らしい行動が観察された直後の外出は以前のとは明らかに異なっていた。この時より以前には、テンは目覚めると寝床に藁をかぶせることなしに寝床を出て、ノミやダニなどの寄生虫にかまれて痒くなつたところを口や後足で簡単に搔いた後すぐに外出していた。

以上のような行動の変化から、2012年4月4日の夕刻



写真10. 出産後初めての非常に念入りなグルーミング (2012年4月4日21時過ぎ)

(17:22～18:00頃にかけての間）に出産が行われたことが確実になった。母親はこの念入りなグルーミングの後に外出した。出産から4月5日8時までの間に2回の外出が観察されたが、いずれも1時間半程度で帰室しており、冬期間に見られた9～12時間に及ぶような長時間の外出は行われなかった。室内では数回の排泄とベッドメイキングを行った以外はほとんど寝床の中で眠っていた。その後、4月15日までの期間は外出時間が3時間ほどに伸びており、この期間の2晩は1晩に2回外出している。

4月11日になって、4月9日撮影の映像を点検していたところ、不明瞭ながら母親のそばに仔らしい姿が写っていた。そして、4月10日の映像には2匹の仔がはっきりと写っているのが確認された（写真11）。また、4月11日のライブ映像では、寝床で丸まっている母親の腹部で盛んにうごめいている仔の姿が観察された。仔は頭胴長が7～10 cm位で、1997年4月26日に三瓶自然館に持ち込まれた仔（写真17）に比べると大分小さいように見えた。

出産後2週間位までは、母親は寝床の中で小さな仔を押しつぶさないように注意深く抱いていて自由に体を動かせなかつたのだろう。寝床から出てグルーミングを終えると、後足で立ち上がり、部屋の天井にある梁に前足をかけて疲れた腰を伸ばすように思いっきり背伸びをし（写真12），それから外出した。このような背伸びは4月9日に2回、12日と13日に1回ずつ、いずれも外出直前に行われた。

4月18日には、仔は4月9日の2倍ほどの大きさ（15 cm位）に成長していて、動きもずっと活発になり、寝床から仔がはい出る度に母親が口にくわえて引き戻すのがよく見られた（写真13）。この頃になると、母親は外出前に梁につかまって背伸びすることはしなくなつており、寝床の中では仰向けになつて寝たり寝返りを打ったりもした。母親が寝床の中にいる時は、藁をかぶつて寝ることもしなくなつていた。

母親は、排泄したくなると突然のように寝床から飛



写真11. 仔の姿を初確認 (2012年4月9日)



写真12. 梁につかまって背伸びする母テン (2012年4月9日)



写真14. 1回目の仔の運び出し (2012年4月20日)



写真13. 仔を寝床にくわえ戻す (2012年4月12日)

び出して、先ず痒いところを簡単に搔き、それから排泄した。そして、排泄をし終えるとすぐにまた寝床に潜り込んだ。

出産前には、外出時に寝床に藁をかぶせるような行動はしなかったが、仔が生まれてからは、外出する際には必ず寝床の上に藁を念入りにかぶせてから静かに寝床を抜け出し、ちょっとだけグルーミングしてから外出した。母親が寝床を離れ外出している間中、仔は寝床の中ですっと眠っているらしく、母親を探して藁の外に姿を現すようなことはなかったし、藁の中でゴソゴソ動き回る様子も見られなかった。

(2) 1度目の仔の搬出 (生後16日目)

4月20日、この日の母親は14時頃から1時間間隔くらいで寝床から突然に飛び出してはすぐに寝床に入ることを繰り返した。このような寝床からの飛び出しは、排泄時やグルーミングする時によく見せた行動である。母テンは、寝床を飛び出して排泄しようとしたものの寝床から這い出そうとする仔を見つけるとすぐに引き返し、仔を寝床の中に引き戻すといったことの繰り返しで、仔の様子が気になって仕方がないとでもいった感じで非常に落ち着きがなかった。排泄したくても、仔が気掛かりで排泄できないようであった。

19時37分頃、母親は仔の1匹を口にくわえて部屋の外に出て行った。しかし、数分後にはその仔をくわえて戻ってきて寝床に戻し、そこに潜り込んでしまった。母親は、19時53分にベッドメイキングして外出したが、20時40分に帰室。その直後、1頭目の仔をくわえて外出した(写真14)。約1時間後の21時39分に戻ってきて、2頭目の仔をくわえて外出した。それから4月30日に仔を連れて戻ってくるまでの10日間、一度も帰室することがなかった。

(3) 仔を連れて帰室 (生後26日目)

4月20日に仔を運び出した母親が、4月30日に10日ぶりに仔をくわえて戻ってきた。

部屋の最奥部の隅に仔を1匹置くと、寝床を整えてその中に仔を運び込んだ。その後しばらくしてから外出し、もう1仔をくわえて帰ってきてすぐに寝床内に運び込んだ。2頭目の搬入は、1頭目の搬入から約20分後であった。1度目と2度目の仔の搬入に要した時間から考えて、遠く離れているとしても約90 m離れたところにある別の建物から帰ってきたものだろうと推察された。

帰室後のテンは顕著な行動がほとんど見られず、寝床の中で寝ているか、排泄やグルーミングしているか、仔が母乳を飲む様子が見られるくらいであった。母親がグルーミングや排泄する時には、以前見られたのと変わらず突然に寝床を飛び出して、それを済ませるとすぐに寝床に戻った。

5月7日頃になると仔の動きもかなり活発になって、母親にじゃれついてかみつくような仕草を見せるようになった(写真15)。この頃には母親は外出する時に寝床に藁をかぶせるという行動をしなくなり、そっと寝床を抜け出すとそのまま外出していった。

(4) 2度目の仔の搬出 (生後34日目)

5月8日朝から9日の朝にかけて(おそらく8日の夜と思われるが)、再度、仔が運び出された。しかし、録画



写真15. 母親にじゃれつくようになった仔（2012年5月8日）

装置の不備で、搬出の様子は映像として残っていなかった。5月8日朝の時点での仔テンの大きさは、母親の体との比較により頭胴長20 cm余りと推定された。仔の毛色は、赤外線撮影の映像なので白黒でしかわからないが、喉から胸部が白色で他は黒味がかかった毛色のパターンからすると、夏毛の成テンと同じような毛色のパターンであるように思えた。この時点では、仔の歩行は不完全でヨタヨタしており、目はまだ開いていない。母親の体色は、顔面が黒くなつて体は冬毛よりも若干暗い色になっているものの、まだ冬毛のような色である。ただ、喉から胸にかけては背よりもかなり明るい色をしており、体毛も短くなつて体つきはほつそりしてきた。

(5) 仔を連れての2度目の帰室（生後35日目）と開眼（生後36日目）

5月9日18時19分頃に再び仔をくわえて帰室し、翌10日10時30分の時点では母仔ともに寝床の中で眠っていた。仔を5月8日夜に運び出したと考えられるから、約1日部屋を空けただけで帰ってきたことになる。

5月10日、母親は仔1頭を寝床からくわえ出して寝床の前に置き去りにしたまま、単独で外出していった。この時点で仔の目は開いていたが、まだはっきりと見



写真16. 開眼の初確認（2012年5月10日）

えていないようであり、四肢で立ち上がることも下手でよたよたしていた。仔は、頭胴長が25~30 cmほどに成長していた。この時、仔の目が開いているのがはっきりと確認できた（写真16）。目が見えるようになったためか、授乳時の仔の動きが前日よりも活発になっているように感じられた。

因みに、近縁種であるクロテン (*Martes zibellina*) が開眼するのは生後34~36日目⁽²⁾、門歯が萌出するのは38日目⁽³⁾だという。

(6) 3度目の仔の搬出（生後37日目）

5月11日夕方から13日朝までの間に、3度目の仔の搬出が行われたようである。5月9日に帰室してから2日目に搬出したことになる。その後、二度と帰って来ることはなかった。記録装置の不備で、この時の映像は記録されていない。

4. 民家への侵入と出産例

(1) 民家への侵入

三瓶自然館には、「自宅の天井裏に動物が住み着いて、夜中に大きな音を立てて困る。何とかならないか。」というような相談が時々寄せられる。侵入者はムササビの場合もあるが、山林から隔たった民家の場合は大抵テンである。テンが民家に住み着く理由は、必ずしも営巣場所の不足からばかりではない。民家の周囲には食料となるものが多くあり、家屋の構造が営巣場所に適していることも理由の一つである。テンは、一度民家に住み着くとそこへの執着心は強く、テンが巣くっている天井や壁を外側から棒などでドンドン叩いたくらいではなかなか追い出すことができない。動物忌避剤を置いたり殺虫剤の煙霧を焚いて一時的に追い出せたとしても何日もすればまた戻ってくるし、長く離れていたとしても翌冬には大抵戻ってくる。テンが侵入する家屋は山間部ばかりでなく、山林に接する市街地や、場合によっては山林から1~2 km以上も離れた民家に巣くうこともある。出雲市神門町の例は、営巣場所になった民家からテンの住めそうな山林まで3 kmも離れていた。また、松江市栄町の例は、営巣場所の近くに小さな社寺林が点在するものの周囲は完全に市街地に囲まれており、テンの住めそうな最も近い山林まで約3 km離れていた。松江市浜乃木町の民家（JR乃木駅前）の場合は市街地、江津市二宮町の例は住宅地であり、両者とも山林から1.5 km以上離れている。家屋へのテンの進入経路は様々だが、外壁を上って軒下にある隙間から侵入したり、床下に入り込み外壁と内壁の間を通って天井裏に侵入する例がよく見ら

れる。

(2) 民家での出産例

民家内での出産例はよくあり、産仔数は2頭が普通である⁴⁾。民家内では、壁の間に仕込まれた断熱材を巣材として、そこで出産する例が時々見られる。

出産例① 1991年5月4日、出雲市大社町西部に位置する保育所の天井裏で生まれたテンの仔2頭が、室内に落し保険された。その夜、仔を探しに現れた母テンによって室内のカーペットが搔きむしられ、辺り中に糞尿がされ、部屋中が荒らされた。保育所ではこの状況を見て、仔を誘拐された母テンが仕返しに来たと考えたようである。5月6日には母テンが捕獲され、3頭とも5月7日に筆者が引き取り、3ヶ月ほど保護飼育した後に遠くの山に放った。

出産例② 1993年春、遼摩郡（現在の大田市）仁摩町大國の山間部にある農家で、使われなくなった牛小屋の二階に保存してあった稻藁の中にテンが巣くっていた。恐らくそこで出産したものと思われるが、その後隣接する納屋の一階の天井と二階の部屋の床との間に仔連れで移り住み着いた。仔の姿を確認できなかったので産仔数は不明である。テンが住み着いていた天井裏には、この農家で飼育していた鶴の卵の殻やテンの糞などが散乱していた。

出産例③ 1993年4月11日の昼過ぎ、三瓶自然館テンの小屋にあるテンの部屋から「キューキュー」というような幼獣のか細い鳴き声が聞こえた。鳴き声から、少なくとも2頭はいるように思われた。寝床の藁の中にいるので姿は見えなかつたが、数日前位に生まれたようだった。

出産例④ 1997年4月26日、三瓶山北の原にある別荘地の建物の外壁と内壁の間で生まれたテンの仔（体長15 cm位 - 写真17）が三瓶自然館に持ち込



写真17. 自然館近くの別荘で生まれ、自然館に持ち込まれた仔（1997年4月26日）

まれた。壁の間に仕込まれている断熱材が碎かれ、寝床が造られていたという。この時の産仔数は2頭（性別不明）である。この仔はすぐにもといた場所に戻されたが、危険を感じた親が別の場所に連れ去ったようである。

出産例⑤ 2012年3月8日、大田市久手町の民家内で、まだ小さなテンの仔が捕獲されたという電話があった。残念ながら、産仔数は聞き逃したが、生後あまり経っていないということだった。この場合も、外壁と内壁の間で出産し、寝床に壁の間に入れられた断熱材が使用されていた。一般的に、二ホンテンの出産は3月末～4月初旬であるが、この場合は非常に早い時期における出産例だといえる。

5. 1993年撮影のVTR映像から

(1) 食べ物隠し行動

三瓶自然館が開館して間もない1991年11月9日、本館から北の原草原へ向かう木道の途中にある「あずまや」の梁の上に、頭胴長約20 cmのノウサギ (*Lepus brachyurus*) の幼獣1頭が引っ掛けられていた。このノウサギは、梁丸太の上面に約5 cm四方の大きさで開けられていた穴に頭部から肩位までの部分をしっかりと押し込まれ下半身がだらりとぶら下がった状態になっていた。これが何者による仕業なのかその時点では明らかでなかったが、その後の観察によってテン



写真18. 樹洞への餌隠し（1993年4月16日）



写真19. 鶴卵の運搬（1993年4月27日）

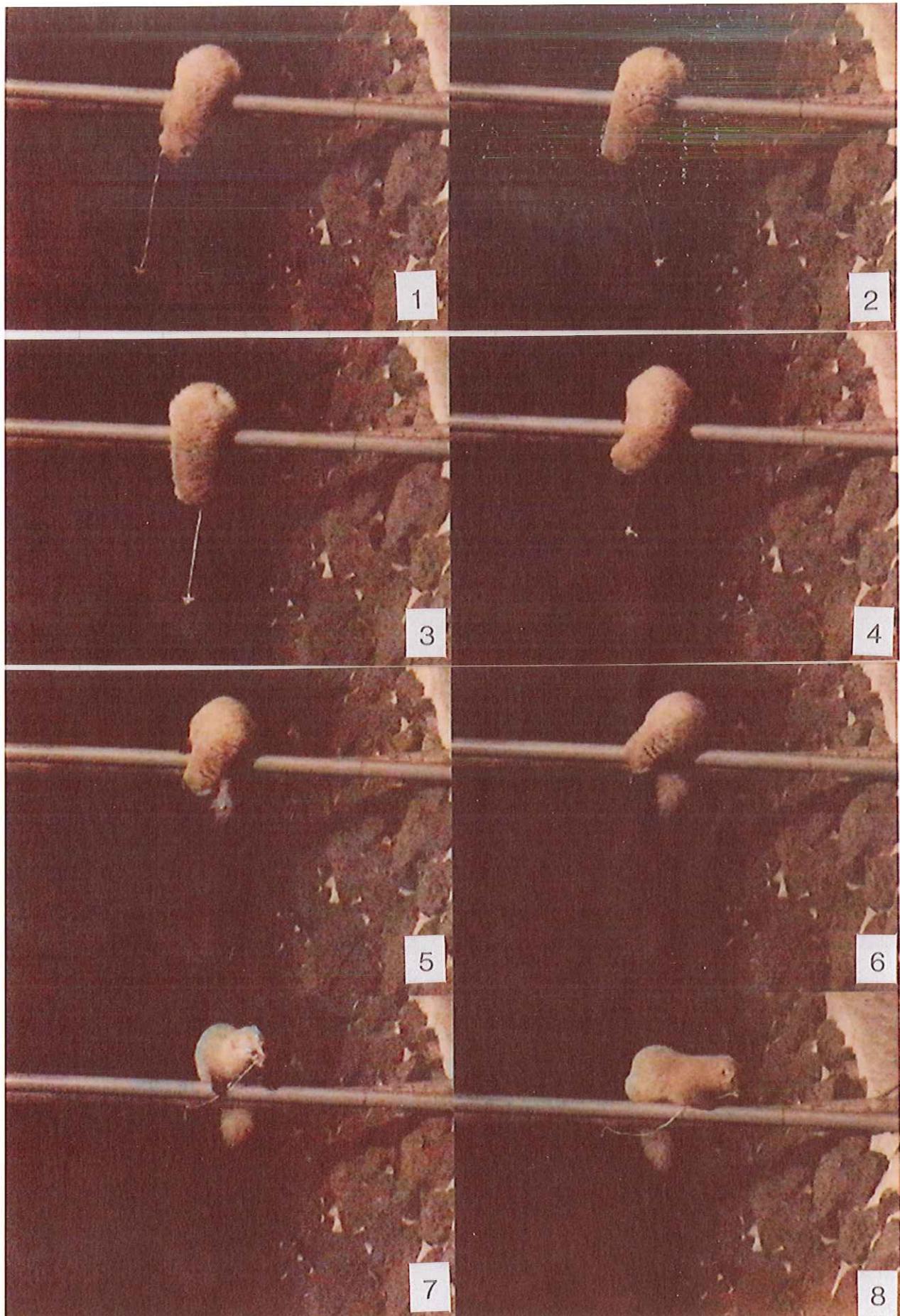


写真20. つり下げられた餌の獲得 (1993年3月7日)

に隠された余剰の食料だと判断された。このあずまやの柱には、テンが上り下りした時に印された多数の爪痕が残されていた。

1993年初めの冬に三瓶自然館の裏で餌付けされたテンは、地面や雪上に撒かれた餌（鶏肉や果実等）がその場で食べきれないほど余っている時、それを口一杯にくわえてどこかへ運び去った。数分後に戻って来て、また同じように運び去った。この行動は、そこに撒かれている食物が無くなるまで何度も繰り返された。後になって、これは余った食べ物を隠すための行動だとわかった。餌隠しの場所は一定しておらず、運び去つてから戻ってくるまでに5分くらいかかるような場所だったり、餌が撒かれている一帯の樹上や樹洞・地上など様々である。恐らく、隠した食べ物を他の個体に盗られないようにするために、隠し場所を分散するのだと思われる。

樹上に隠す場合、幹が枝分かれした又の部分や、樹幹に巻き付いた蔓植物の蔓と樹幹の隙間などに詰め込まれた。また、樹洞の中や、小鳥用に掛けられた巣箱の中にも隠された。地上近くにある樹洞に隠した時は、樹洞に餌を入れた後、周辺の落ち葉を口にくわえて樹洞に詰め込んで隠した（写真18）。地上では、落葉が積もっ

た中に餌を口にくわえて押し込んで埋め、その上に鼻先や前足で周囲から搔き集めた落葉をかぶせて隠した。

なお、1993年に撮影された樹上への餌隠しの映像は、NHK-TVや民放TVによって全国に放映されて話題となつた。

(2) 鶲卵の運搬

テンは森林棲の動物であるが、島根県では近年は里地にも普通に生息しており、山林に比較的近い位置にある民家の納屋や天井裏に居着くことがよくある。

鶲を飼育している農家ではテンに鶲卵を盗まれることがあり、卵の殻がテンがねぐらにしている天井裏などで見つかることがある。そこで、テンが卵をどうやって運搬するかを飼育鶲の卵を使って実験してみたところ、難なく口にくわえて運び去った（写真19）。

(3) 吊り下がった餌の獲得

秋には、竿に吊してある干し柿をテンに盗られることがあり、夜中に柿が吊されている竹竿の上を渡るテンの姿を見たこともあった。そこで、テンが紐の先に吊された食物をどのように取るかを確かめるため、長さ約1 mの紐に肉片を結び付けて横に渡した丸太に吊



写真21-1.



写真21-3.



写真21-2.



写真21-4.

写真21. 冬毛から夏毛への換毛 - (4) は(1)～(3)とは別の個体

り下げてみた。初め、テンはぶら下がっている肉片を下から見上げたり横から見たりしていたが、やがて丸太を渡って肉片を吊した場所までやって来て、前足と口を使って巧みに紐をたぐり寄せて引き上げ肉片を取ってしまった（写真20）。

（4）冬毛から夏毛への毛変わり

冬毛から夏毛への毛変わりは、新しい夏毛が冬毛の下毛として生じ、それに続いて冬毛が抜け落ちることで完成する。換毛は顔面と四肢の先端部から始まり、冬の間白かった顔が吻部から黒色に変わって、4月終わり頃には顔のほぼ全体が真っ黒になる（写真21）。毛変わりの時期は、個体によって多少の違いが見られる。

幼獣の場合、生まれて2週間目頃の体毛は背部が灰色で体下面是白色であるが、成長に伴って黒みを増し、7月頃になって誕生後最初に生えそろうのは夏毛である（写真22）。2012年にテンの小屋で生まれた幼獣は、生後35日齢頃には既に夏毛の体色パターンを呈していた。

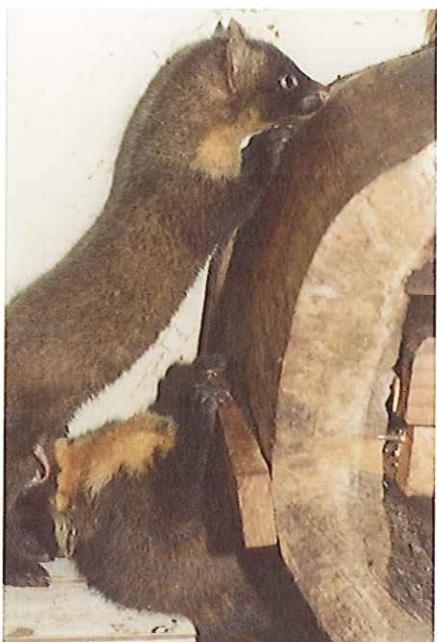


写真22. 生まれて最初に生えそろった時の仔の毛色（1991年7月末）

6. まとめ

テンの小屋における野生ニホンテンの出産と、仔の成長

- (1) 出産日時 parturition : 2012年4月4日 17:22～18:00過ぎにかけて出産した
- (2) 産仔数 litter size : 2頭
- (3) 身体的生長 : 推定頭胴長 head and body length と推定体重 body weight

生後日齢 days after birth	推定頭胴長 HB length	推定体重 body weight
5日齢	約7～10cm	約30g
14日齢	約15cm	約100g
34日齢	約20cm余り	約200g
36日齢	約25cm以上	約300g

テンの身体的な生長は、Novikovがクロテンについて記している⁽⁵⁾のと大体近いものであるといえる。

(4) 開眼 (eyes opening) : 2012年5月10日 (36日齢目)
クロテンの場合34-36日齢で開眼する⁽⁶⁾というから、ニホンテンとほぼ同じである。

(5) 隠れ家からの仔の搬出と、搬入 bring out cubs from the den and bring back to there

仔の出産以後41日の間に、出産場所から仔の搬出が3回行われた。

搬出入回数	搬出 bring out	搬入 bring back
1回目	4月20日夜 (20:40)	4月30日夕方
2回目	5月8日夜	5月9日夕方 (18:19)
3回目	5月11日夜？	以後、搬入は観察されていない

隠れ家から生後間もない仔の搬出と搬入が度々行われるという行動が、他の場所または他の個体でも一般的に見られるものかどうかは明らかでないが、民家の内で出産した数例からすると、出産場所から一度は別の場所に移ることは普通に行われるようである。恐らく、仔は目が開くと急に活動的になり仔同士が活発にじゃれ合うようになると広い場所が必要となり、また、乳離れして食物が持ち込まれるようになると食いかずや糞尿で巣材が汚れたり、ノミやダニなどの寄生虫によって寝床が不衛生になるために、巣材のない広い場所に移動するのではないかと考えられる。

民家内の出産が外壁と内壁の間で行われた例が何例かあり、この場合は壁の内側に仕込まれている断熱材が巣材として利用されていた。そのような場所は非常に狭いため、そこで生まれた仔がある程度生長するとより広い天井裏などに移されるものと考えられる。仔は生長に伴って活動が活発になり天井裏をどたどた駆け回ったりそこで排泄したりして、その家の住人に大きな迷惑をかけることになる。しかし、たいていの場合、6月頃になるとテンの親仔は天井裏（民家）から屋外に出て行ってしまうようである。

樹洞で出産が行われる場合にも、人工隠れ家で観察されたのと同様に、頻繁に隠れ家を移動するかどうかは不明である。

7. おわりに

2012年に生まれた仔と母テンはちょうど離乳期の頃にテンの小屋から出てしまったため、母親が巣に持ち帰った食物を仔に与える姿やその他の親仔関係、仔同士の遊びなど離乳以後の行動や成長の様子を観察することができなかった。次シーズンにもこの場所で出産があるかどうかはわからないが、今後も継続して観察していきたい。今回の映像記録装置では音声記録ができなかったため、隠れ家の中でどのような鳴き声が発せられていたのか全く不明である。今後は、音声の記録も同時にできるようにしたいと考えている。

引用文献

- (1)～(3), (5) : Novikov (1962) Fauna of the U.S.S.R., No.62 Carnivorous Mammals. 177-178. Israel Program for Scientific Translations.
- (4) : 細田徹治&鎧 雅哉(1996) テンとエゾクロテン. 哺乳類 I. 日本動物大百科1,136-139. 平凡社.